

労働過程論からみるキャリア概念

植村 雅史

I 序

「労働」の意味を他者と共通理解できない現代人はおそらくいないであろう。辞書で意味を調べるまでもなく「労働」という語をイメージすることはできる。なにも「労働」という語に限ったことではないが、日常的に使われている言葉でいちいち辞書を引かなければ会話が成り立たないものはない。そしてこの「労働」という語のイメージの主となるものには、「仕事」「収入」「肉体」「頭脳」「感情」など、まだまだ他にもあるかもしれないがおそらくそのようなワードがあがるだろう。

ひとまず国語辞典で意味を調べてみると、1「収入を得る（何かを生産する）ことを目的として、その人自身のからだを使ったり、頭を働かせたりして行動すること。」¹とあるが、これを『哲学・思想事典』で引いてみるとこうなる。2「人間はどの時代でも地域でもつねに生産活動をしてきた。しかしその生産活動を「労働」として解釈するのは近代以降のことである。生産活動はつねに特定の表象体系を帯びていた。人間の現実的生産行為とそれを包む表象は一体である。生産活動はそれを解釈し表現する言葉を伴い、この言葉には固有の歴史と世界像が内在している。労働について語ることは、言語で表現される労働表象について語ることでもある。人間が自然と生産的関係を結び、それを生きることは、同時に各時代に固有の労働表象を、そしてこの表象に凝固する世界解釈を生きることである。」²

他者との共通理解においてイメージされるのはおそらく1としての意味であろう。しかし2における「人間が自然と生産的関係を結び、それを生きる」というようなニュアンスで「労働」という言葉を発している人はそれほど多くはないのではな

いだろうか。本稿において用いられる「労働」という語は、まさにこの後者の意味としてのそれとなる。そして最終的にはこの「労働」「労働過程」という語から「キャリア」というものをとらえることがその趣旨となる。

II 労働過程とキャリアの接点

なぜ「労働過程」と「キャリア」を交差させようとしているのかという動機について、ここで触れておこうと思う。これは稿者が「キャリア」というものを追究していくときの主題となる「思想史」と「キャリア」の組み合わせの根拠ともいえる。

この「労働」という語の定義は先に一応おさえてはみたが、ではこの語がいつ発生して、それが概念として一般化したのはいつのことであったのかということになるともはや稿者の知るところではない。仮に「労働」が明治初期につくられた語だったとすると³、それ以前の江戸時代では「労働」に該当する語は何であったのであろうか。「働」という漢字は国字であって、中世には「労働」の意味で用いられていたという説もあるが、ここで問題にしているのは語源とその時期についてではない。確かにしておきたいことは、この「労働」という語が用いられるようになる前には「労働」という概念がなかったのか、さらにいうと「労働」自体がなかったのか、働く必要のない時代だったのかということである。そのようなはずがないことは反論の余地もないことである。「労働」という語が存在しようといまいと「労働」自体は存在していた。その代替としてどのような語が使われていようとも同じことである。

このような至極当然のことを書き連ねている理

由は、「キャリア」というワードを少し明確にしておきたいと考えているからである。たとえば「キャリア理論」や「キャリア概念」などの学問領域はその浅い歴史ゆえに、それらを専門領域としている者以外にとってはその定義は抽象的である。その一方で、抽象的であるにもかかわらず多くの人たちがイメージするものは、「仕事」や「労働」、「組織」や「人事」といった似通った分類のものであることが多い。しかし実は「キャリア」というワードには、その「仕事」類を包含した「人生」という大きなとらえ方もある。いわゆる「ワークキャリア」に対する「ライフキャリア」という考え方である。

そこで「労働」の語源の話に戻すと、この「キャリア」という語の発生はそれこそ知るに及ばずではあるが、その概念自体は現代に発生したものではない。もちろん「キャリア」というワーディングによって「キャリア」という概念が発生したわけではなく、先に概念が存在するようになりその後「キャリア」という語があてられたのであろう。そして「労働」という語が時間の経過とともに意味に拡がりができかつ明確になっていったように、ちょうどこの「キャリア」というワードが、ここ日本においては今まさに拡がりをつくりながら決定されていく過程にあるものであるといえる。そしてどのくらいの時を経て、「労働」という語と同じくらいの市民権を得ていくのかはわからない。そのようなまだまだ市民権を得たとはいえない「キャリア」という領域を考究していくうえで、己がどのような視角からとらえようとしているのかをはっきりさせておく必要がある。

端的にいえば、この「キャリア」なるものを「人生」としてのそれとして追究していくことが稿者の主題である。「キャリア」という概念を組織論などの社会科学的アプローチから追究する方法や自然科学領域においての心理学としてとらえようとする手法、また哲学・思想として思索しようとする人文科学的検討などがあるなかで、稿者の深めていこうとしている部分は哲学・思想としてのものである。なかでも「ライフキャリア」と「ワーク

キャリア」という概念を、それぞれに「人生観」「労働観」という思想で照射したいと考えている。なぜそのようなアプローチに傾倒するのかといえ、それらはこれから本稿で叙述していく「広義の労働」「狭義の労働」⁴ととらえることができ、それぞれが独立した対象として存在するものではなく、人間の倫理の根源として考えた場合、広義の労働（人生）の幸福のなかには狭義の労働（仕事）が内包されていることが必要条件となるからである。すなわち「広義の労働と狭義の労働」、「人生と仕事」は交差関係にあるということである。つまり狭義の労働が幸せな状況でないにもかかわらず、広義の労働が幸福なはずもなく、それらは必ず相互関係をもって存在しているものなのである。

そう仮定すると、現代社会における「ライフキャリア」「ワークキャリア」、どちらを考察するにしても「広義の労働」から「狭義の労働」が発生してきた歴史の変遷を追う、すなわち労働過程の変容をたどっていくことで、時の「ライフキャリア」「ワークキャリア」の変容も浮かび上がってくることとなり、他方では普遍的な「キャリア」というものもみえてくるのではないだろうか。そして、その過去から現在までの労働過程の質の歴史の変容と時間普遍的、歴史貫通的な労働過程の質を見定めることができはじめて、現代のキャリア概念の一方に光がさすのではないかと想定しているのである。そのような理由から哲学・思想という人文科学的志向によって、「キャリア」というものを検討しようと考えているのである。

III 労働過程論

ドイツ観念論におけるヘーゲルの目的論、労働論を摂取したマルクスの労働過程論は、『資本論』第1巻第3篇第5章第1節に位置付けられている。まずマルクスがどのように労働をとらえていたのかということのを要約するところから試みようと思うが、そのまえに集約的に表現されている代表的な一文を引いてからはじめようと思う。

「労働はまず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。」⁵

マルクスは労働を、自然を摂取し、加工し、最終的には人間に帰する過程であり、同時に労働生産物を生み出していく過程であるとした。そしてこの労働過程には三つの契機があり、それを労働対象、労働手段、労働力とし、そこには労働に対する人間の目的意識、合目的意志が存在しているとした。これを時間普遍的な使用価値⁶を生み出す労働であると考えた。しかし資本制商品経済においては、労働生産物は使用価値ではなく商品として扱われる。そうすると労働に対する目的意識、合目的意志というものは人間から切り取られ、結果使用価値は商品価値に取って代わられることとなる。以上のことから、前近代的な労働としての使用価値を生み出していく時間普遍的な労働と資本制商品経済下における商品価値をその第一義とする労働という二つの労働を前提して、資本主義的労働というものが最終的には疎外された労働によってしか成立できないものと結論している。

ちなみに疎外された労働については『資本論』以前の『経済学・哲学草稿』でこのように記されている。「疎外された労働は人間から、(1) 自然を疎外し、(2) 自己自身を、人間に特有の活動的機能を、人間の生命活動を、疎外することによって、それは人間から類を疎外する。すなわち、それは人間にとって類生活を、個人生活の手段とならせるのである。第一に疎外された労働は、類生活と個人生活を疎外〔たがいに疎遠なものに〕し、第二にそれは、抽象のなかにある個人生活を、同様に抽象化され疎外されたかたちでの類生活の目的とならせるのだ。なぜかといえば、第一に、人間にとって、労働、生命活動、生産的生活そのものが、たんに欲求を、肉体的生存を保持しようとする欲求を、みたすための手段としてのみ現われるからである。しかし〔真実のところをいえば〕、生産的生活は類生活である。それは生活をつくり

だす生活である。生命活動の様式のうちには、一種属〔species〕の全性格が、その類的性格が横たわっている。そして自由な意識的活動が、人間の類的性格である。ところがこの生活そのものが、もっぱら生活手段としてだけ現われるのである。」⁷と。すなわち、人間が労働生産物から疎外されるということと労働過程における人間の精神的活動が資本家に奪われるという二つの面が含まれており、それが人間性の喪失へとつながり究極的には類的な人間からの個的人間の疎外、つまり人間が類からも疎外されてしまうことであると結着させているのである。

しかしその後の『資本論』においては、資本家による賃労働者の価値的搾取の問題化にだけ焦点が当たることによって、使用価値と労働の関係が見落とされてしまうのだが、この脱落してしまう「使用価値と労働の関係＝広義の労働」⁸から「生産価値と労働の関係＝狭義の労働」への変遷によって労働自体が変容するということは、仮に労働というものを人生と見立てた場合、人生のとらえ方そのものが変容してしまうということと同義なのである。

IV 労働過程における目的意識、合目的意志

次にマルクスの労働に対する人間の目的意識、合目的意志について、以下の一節にもとづきみていくことにする。

「蜘蛛は織匠のそれに似た作業をなし、蜜蜂はその蠟房の構造によって、多くの人間の建築師を顔色なからしめる。しかし、最悪の建築師でも、もとより最良の蜜蜂にまさるわけは、建築師が蜜房を蠟で築く前に、すでに頭のなかにそれを築いているということである。労働過程の終わりには、その初めにすでに労働者の表象としてあり、したがってすでに観念的には存在していた結果が、出てくるのである。彼は自然的なものの形態変化のみを引起こすのではない。彼は自然的なものの中に、同時に、彼の目的を実現するのである。彼が知っており、法則として彼の行動の仕方を規定し、彼がその意志に従属させねばならない目的を、

実現するのである。そして、この従属は、決して孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のほかに、目的に向かって進む意志が、注意力として現われ、労働の全継続期間にわたって必要とされる。しかもそれは、労働がそれ自身の内容とその遂行の仕方とによって、労働者を魅することが少ないほど、したがって労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の活動として享受することが少ないほど、ますます必要とされるのである。」⁹これは蜘蛛や蜂の本能としての労働を引き合いに、織匠や建築師（人間）は生産物の実在的な完成の前段において表象としてのそれをすでに完成させていることから、動物の本能的労働とは異なり、人間の労働は目的意識性に則っているということを説明している。そのうえで労働過程というものは、「使用価値を作り出すための目的に合致した行動であり、人間の欲望のための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件であり、人間生活の永久の自然条件であって、したがって、この生活のいかなる形態からも独立したものであり、むしろ、人間の一切の社会形態に等しく共通なものである。」¹⁰と展開している。

これによってマルクスは、精神的なとらえ方としての労働というものには、合目的的に生産し、その方法も合目的的であるという特徴があると考えているといえる。しかしこのように『資本論』においては、自然と人間の間交通、すなわち労働過程における時間普遍的、歴史貫通的な本質には言及しているものの、それについての歴史的変遷をたどることはしていない。マルクスの言葉を待つまでもなく、いつの時代も人間は労働過程において、自身の目的意識、合目的的意志をもっていったことであろう。しかし当然ながら、時代の変遷に伴う社会の変化によって、その目的意識性や合目的的意志というものもまた変容してきたのである。その変容、すなわち労働過程における人間の目的意識性、合目的的意志の質における歴史的な変容を知るにはマルクスの触れることのなかった目的意識性、合目的的意識の質的変遷を追う

必要があり、それが現代社会でのキャリアを考えていくうえでの基盤となるものであると仮定する。

なぜマルクスが『資本論』において、労働過程における時間普遍的本質については説明したもののその目的意識性の歴史的変遷にまでは論を展開しなかったのかということだが、その理由は彼がその中期から後期において市民社会の解剖学としての経済学に精通していったということに尽きるであろう。学位論文として「デモクリトスとエピクロス自然哲学について」を残してはいるもののマルクスには自然哲学に関する一連となる著作はない。理由如何にかかわらず、やはり『資本論』において労働過程すなわち自然と人間の関係についての歴史的な変容、自然哲学が追究されなかったことは残念なことである。しかしこの自然-人間関係としての労働過程を追うことで現代社会を還元するための自然哲学を深めることとなり、結果として「労働＝生活＝人生」の変容から現代ひいては将来のキャリアというものを考える際の基盤としてみたいという稿者にとって考究の緒となったことは、マルクスの問題意識があつてこそといえる。

V 自然と人間交通

「労働はまず第一に、人間と自然とのあいだの一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整する過程である。」¹¹

先に引いた一節であるが、このようにマルクスは労働とは人間と自然の交通における過程であり、その労働過程は人間と自然との間における物質代謝を人間の行為によって働きかけるものであるとしている。この物質代謝とは自然を物質的部面において加工し新たな物をつくる過程のことである。そしてこの労働過程には、自然-人間関係における物質的な交通とともに、精神的活動としての目的意識性、合目的的意志の交通も生じるとしている。つまり労働過程における自然-人間関係での交通には、物質的な交通と精神的な交通があるということである。ちなみにここでいう労働過程

とは、自然の物質的部面に労働を加えて「使用価値を作り出すための目的に合致した行動」という、いわゆる前近代的な労働過程であり、広義の労働過程ということになる。そしてこれが資本制社会へと移行するにつれて、「使用価値」に量的な労働を投下して量的な「使用価値」を商品に変換する過程へと移ろうこととなる。これは自然-人間間の交通が「使用価値」の世界から量的な「商品価値」の世界へと変わり¹²、広義の労働から狭義の労働への潮流が発生するということである。

このようにみてきたときマルクスの自然哲学観が、自然-人間関係においてそのなかに成立する自然そして人間の存在をとらえたものであることがわかる。それは『経済学・哲学草稿』の「人間の普遍性は、実践的にはまさに、自然が（1）直接的な生活手段である限りにおいて、また自然が（2）人間の生命活動の素材と対象と道具であるその範囲において、全自然を彼の非有機的肉体とするという普遍性のなかに現れる。自然、すなわち、それ自体が人間の肉体でない限りでの自然は、人間の非有機的身体である。人間が自然によって生きるということは、すなわち、自然は、人間が死なないためには、それとの不断の〔交流〕過程のなかにとどまらねばならないところの、人間の身体であるということなのである。人間の肉体的および精神的な生活が自然と連関しているということは、自然が自然自身と連関していること以外のなにごとをも意味しはしない。というのは、人間は自然の一部だからである。」¹³ということからも明らかである。

VI 広義の労働過程における目的意識性の具象化

労働過程における自然-人間関係での交通には、物質的な交通と精神的な交通がある。そしてこの自然-人間間の精神的な交通の歴史の変遷をみていくことで、労働過程における人間の目的意識性の質的変容を知ることができ、それを基にして現代キャリアをとらえることでこそ人間の本来的な在り方に則ったものとなると仮定するというのが前段までの流れであったが、ここでは労働過程

=自然-人間の交通のうち、精神的な交通としての目的意識性、合目的意志の変容を前近代の非商品経済から資本制商品経済への移行という時間軸においてとらえてみたいと思う。

はじめに精神的な交通としての目的意識性、合目的意志が何に宿っているのかということ、労働疎外論を時間の相対性という視点から追うことで表出させてみることにする。先に労働疎外とは、人間が労働生産物から疎外されるということと労働過程における人間の精神的活動が資本家に奪われるというふたつが含まれており、それが人間性の喪失へとつながり究極的には類的な人間からの個人的疎外、つまり人間が類からも疎外されてしまうということと要約したが、これを時間の相対性という視点で見つめ直したときにはつぎのような展開となる。

非商品経済から資本制商品経済へ移行すると、商品価値を高めるために投下する労働量が増大することとなる。言い換えれば狭義の労働における労働量が増大することである。この狭義の労働における労働量が増大すれば、人類に等しくあたえられた時間であっても流れる速度が加速することとなる。それは科学技術の発展にともない労働がシステム化され大量生産体制の実現へと労働の形態変化がおこることが原因である。つまり前近代での「技能」にもとづいた労働から「技術」に組み込まれた労働へという変化である。それは1個の生産物をつくるために1時間を費やすという時間の流れの労働から、1時間に同じものを効率的に10個つくるために時間の流れを10倍にしなければならない労働への変化ということである。そして時間の流れが加速すれば、それに追いつくために人間は思考時間を減らし、それを行動時間に組み込むようになる。これは考える時間に反比例して、動かざるをえない時間が増えるということであり、精神的活動が減少し、肉体的活動の時間が増すということである。そして結果として人間としての精神性を失い、人間が機械化することになる。それは労働疎外論のうちの労働生産物における労働の疎外ではなく、精神における労働

の疎外ということである。人間類からの疎外である。そして人間性の喪失、人間類からの疎外に陥らないためには、それから疎外されないで済む時間の流れにおいて生活＝労働する必要があるということであり、つまり本来の人間の生活速度、労働速度で人生を送る必要があるということである。

本来の人間の生活速度、労働速度ということをも具体的にいうのであれば、こういうことになるだろう。たとえば都会に出てきたばかりの人が、そこを生活空間として歩き慣れている者たちの動きの速さに圧倒されるというものがある。これが、生活によってどれだけ時間に追われているのかという目に見える差異であろう。また買い物をしてレジで清算をするシーンでも同じようなことがいえる。特段レジに並んでいる人がいなくとも、せっかちに清算を済ましてもらうことを待つ都会の生活者に対して、たまたま用事でレジ担当者が休みとなったときに不慣れた代理者が不器用な手つきでレジを打っていたとしても、そのようなことはお互い様といって当然のごとく清算が終わるのを待てるという差異である。これらは、都会と田舎という場＝空間の違いが引き起こす時間の相対性である。

しかし果たしてこの時間の相対性というもの、空間的な差だけが生み出すものなのであろうか。こういう場合も考えられる。週末における百貨店内のエスカレーターでのワンシーンである。本来エスカレーターというものは、その安全性の確保のために歩行は禁止されているのだが、日本人の礼儀文化の曲解がまさに体现されているかのように、その片側を空けて立つということが常態化している。そして平日の会社や駅というわけでもない、週末のショッピングのときでさえもエスカレーターを早足で歩行する人たちがいる。これなどはもはや人間の精神的活動としての時間のあり方に必要な速度を、相当に超過した現代社会的時間に支配されている状態といえるかもしれない¹⁴。

このように労働疎外論を時間の相対性という視点でとらえたときにあらわれてくる、労働過程に

おける精神的活動を具象化する度量衡のひとつは、「技術」と「技能」という秤である。つまり精神的交通での目的意識性、合目的意志という抽象的なものを具象化しようとしたときに表出してくる一手段は、「技能と技術の関係性」いわゆる「技術論」ということなのである。一步踏み込んでいえば、こういうことである。「広義の労働」すなわち前近代における時間普遍的、歴史貫通的な労働においては、使用価値をつくりだすことがその目的であったが、「狭義の労働」という資本制商品経済下における労働では、それが商品価値、貨幣価値をもとにした要請となる。商品価値、貨幣価値をもとにした要請とは、いわゆる効率性や合理性である。最終的にはこの効率性や合理性と技術、そして非効率性や非合理性と技能という組み合わせから労働の精神的活動における目的意識性を浮かび上がらせることができるのではないかと仮定したということである。

VII 労働過程における「技術論」

そこでここでは、労働過程における精神的な交通としての目的意識性、合目的意志を抽出するための「技能と技術の関係性」を、日本の「技術論」における異なる立場に触れながら定めていくことにする。

ひとつは、武谷三男の技術論である。武谷はそれまでの技術論を「哲学者の単なる感想であるか、また経済学者の便宜上の設定にすぎず、技術そのものを進める上に何らの力も持たないもの」と前提し、本来「正しい技術論は技術家をして技術そのものの発展をなさしめうる有力な指導原理でなければならない」とはじめる。そして「技術は自然と社会を媒介するものであり」、「単に自然科学的な概念ではなくて社会における生産に関する概念」であるにもかかわらず、「技能を技術と混同される事が多く、とくに日本においてこれがはなはだしかった」とし、「技術は客観的なるものであるのに対し、技能は主観的心理的個人的なものであり、熟練によって獲得されるものであり（中略）、技術はこれに反して客観的であるゆえに、組織的

社会的なものであり、知識の形によって個人から個人へと伝承という事が可能なのであり（中略）、社会の進展に伴い伝承により次第に豊富化されて行く」としている。つまり「技能も技術も、自然法則性に根拠があ」りながらもそれぞれを「技術は客観的自然的であるのに対し、技能は主観的自然的なものである」と規定している。そのうえで「技術の立場というものは常に、主観的個人的な技能を、客観的な技術に解消して行く事にあり」、「技術とは人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用である」ということをその本質的規定とした¹⁵。これは技能というものは主観的なものを多分に含んでいるものであるが、それに対して技術とは客観的であり科学的なものであることから、技術の方が技能よりも優れたものであるという考えである。

他方渡植彦太郎は、『技術が労働をこわす』¹⁶のなかで「技術知」「技能知」という概念を、「仕事知」「生活知」、「仕事集団」「生活集団」という言葉を用いながら、技能と技術の関係性から昇華させている。そしてその渡植の論をもとに、内山節は技能を以下のように定義している。「一般的には技能とは、経験的につかみとられた労働のなかの“物をつくる知恵”として、あるいはそのような労働の精神的力能としてとらえられている。この定義は技能の半分の意味を満たしてはいるが、充分な規定ではないように私は思う。なぜなら本来の技能は、使用価値の社会に生まれたおらかな労働の世界のなかで創られたという面をもっているからである。作用としての自然のなかに労働を加えて使用価値＝労働生産物をつくりだす、この過程が商品や貨幣の論理の介入を受けずに、いわば純粋な使用価値の生産の場になるとき、この条件のなかでつくられた労働の精神的力能を、あるいは経験的につくられた労働の知恵を、私たちは技能と規定しうるのではないだろうか。だからこの技能は、いま私たちが技能工というように使うときの技能とは少し意味が違う。それは労働する個人の精神的力能であるとともに、使用価値の社会がつくりだした社会的産物である。」¹⁷と考へそ

のうえで、「貨幣経済が浸透し、生産-労働過程が貨幣に裏付けられた商品価値を生産する場所になっていくとき、自然と人間の精神的交通も、技能の内容も変わっていく」¹⁸と武谷とは対蹠的な考え方をしている。

稿者はこの内山の理論展開から多くの示唆をあたえられたのだが、この文脈でとらえたとき「技能」と「技術」というものが、以下のように整理されるように思うのである。「技能」とは前近代の非商品経済下で使用価値をつくりだすための非効率性、非合理性労働すなわち広義の労働過程での精神的交通としての目的意識性、合目的的意志に根付くものであり、「技術」とは資本制商品経済の規定下において商品価値を生み出すための効率性、合理性労働すなわち狭義の労働過程での物質的交通としての目的意識性、合目的的意志から生じるものであると。仮にこのように「技能と技術の関係性」をとらえたときに、これを現代の労働事情に当てはめてみるとどのようなことがそこから浮上するのかということに次をみていこうと思う。

VIII 現代の労働における「技能と技術の関係性」

現代の労働事情と「技能と技術の関係性」を交差させるにあたり、ここでは日常生活とは切り離すことのできない「調理」という労働を例にとってみようと思う。

普段昼食をコンビニエンスストアの弁当で済ませている人たちがいるとしよう。彼らの多くは、「味」よりも「価格」、「優雅な気分」よりも「満腹感」ということを昼食選択の決定要因にしているのではないだろうか。その弁当は工場で画一的に決められたラインに沿って、すべてが同じものとして大量生産されたなかのひとつである。そしてその調理労働においては、「商品価値が高いものであること＝売れる弁当であること」「経費を極限まで低減すること」「生産時間を極限まで短縮すること」という三点を満たすことが要請されるのである。この調理労働をAとする。この労働Aにおいては弁当という労働生産物＝物質的量的生産がその主目的となる。いかに短時間で、安い経費で、

商品価値の高い弁当を大量につくれるのかということである。それには「商品価値を生み出すための効率性、合理性労働、すなわち狭義の労働過程での物質的交通としての目的意識性、合目的意志から生じるもの」である「技術」がなによりも求められる。そこには、調理する人間の「技能」となる精神的交通としての目的意識性はほとんど入り込む余地はない。

対照的に、同じ時間に高級レストランで食事をしている人たちが求めているものはどうであろうか。おそらく「価格」よりも「味」であり、「食欲の充足」より「非日常的な気分」であろう。となればそれらを求める消費者に対しての労働の目的は、もちろんベルトコンベアー化した弁当づくりにおける労働の目的とは異なってくる。つまり弁当づくりにおける要請三点との差異が生じてくるということである。この調理労働を B とする。労働 B では、調理をするための時間が A のように極端な制約を受けずに済むために、A 同様の短時間を追求する必要性は低くなる。とはいえ複数組の客を相手にすることが求められるために、ランチ時間が終了するまでに消化しなければならない労働量は当然計算する必要がある。次は経費である。提供する食事のために利用する食材は、客が納得する厳選された素材を用意することが店の信用にも関わってくることで、A のようにはいかないのは明白である。以上のことより B においては、調理労働者には「非効率性、非合理性労働すなわち広義の労働過程での精神的交通としての目的意識性、合目的意志」を担保する「技能」を発揮することが許されることとなる。つまり、低価格-満腹感という商品価値よりも、味-贅沢気分という使用価値を求める消費者を対象としたときに「技能」が求められるようになるということである。しかし客数と営業時間の関係において、時間と生産物における最大の利益を計算したうえでのシステム化した労働も求められる。すなわち、複数の調理労働者による分担作業によって成立する労働である場合が多いということである。となれば、そこには「技術」としての労働も共存しなくてはな

らない。つまり A に比して、「技能」の割合は格段に増加するものの「技術」も依然必要とされる労働ということになる。

最後に、人里離れた隠れ家で1日限定10食しか提供しない店で考えてみる。「価格」よりも「味」、「食欲の充足」より「非日常的な気分」という要請は B と同様であろう。しかしここでいう「非日常的な気分」には、B とは異なる「時間」的な概念が要求されることになる。それは現在進行形としての「優雅な気分」という意味での非日常的な時間ではなく、「懐古」という意味の過去形の時間である。そこにはもちろん「空間」的な概念も侵入している。つまりこういうことである。都会から離れた立地ということは、より自然に近い空間がその場所となる。それは原風景的なものを演出している空間ともいえる。それがいつの時代であるかは限定できないが、少なくとも現代の環境ではなく、人が懐かしさを思い出す程度には昔を思わせる空間である。そこで客が求めるものには、当然現代時間からの逃避という目的が含まれていることだろう。それは A、B の食事では満たされることのない、広義の労働としての時間が流れている時代の時空間と言い換えることができる。となれば、調理労働者自身が求めているものも、狭義の労働下での物質的な目的意識性、合目的意志ではなく、広義の労働における精神的な目的意識性、合目的意志にもとづいた「技能」ということになる。

言うまでもなくこれら A、B、C の主なる労働とは、昼食を提供するための「調理」という同じ労働である。しかし調理という同じ労働であっても、その対象（客）によって求められるものが三様となる。そうならば必然的に労働者が労働に投下しなければならないものも異なるものとなる。そしてここに、「技能と技術の関係性」を持ち込むと以下のように整理することができる。

A. 「商品価値 > 使用価値」: 「狭義の労働 > 広義の労働」: 「技術 > 技能」

B. 「使用価値 \geq 商品価値」: 「広義の労働 \geq 狭義

の労働」：「技能 \geq 技術」

C. 「使用価値 $>$ 商品価値」：「広義の労働 $>$ 狭義の労働」：「技能 $>$ 技術」

現代の資本制商品経済における労働事情においては、 $A>B>C$ の割合となるわけだが、これを労働過程の変遷であらわせれば、前近代では「労働=C」であったものが資本制生産様式に移行するにつれて、「 $C>B$ 」だったものが次第に「 $B>C$ 」となり、さらに資本主義体制が強固になるにしたがって「 $A>B$ 」と変容してきたということになる。つまり、社会的に「技術」による労働を要請されるようになることで、個的な「技能」を發揮する機会が減少し、その先端にある現代資本制商品経済下に身を置くわれわれは、「技能」に宿る労働過程の精神的交通における目的意識性を發揮することが許されにくい社会に生きているということになるのである。そのことを前提して「労働=生活=人生」というキャリアをとらえようとしたときに、その先端部分の現在の経済、社会システム下だけでとらえようとするのではなく、そこに至る労働過程、ひいては「広義の労働過程-技能-精神的目的意識性」を踏まえることの重要性が理解できるのである。

IX 精神的活動をととした労働とキャリア

広義の労働過程における「労働=生活=人生」といった関係はそもそも未分化なものであったはずなのだが、前近代的な社会から近代以降の資本制社会に変わることによって、「労働と生活」「労働と人生」といったものを目的-手段の関係に分離してしまったと言い換えることができる。つまり労働と生活というものが、生活の手段として労働をとらえる、労働のための生活をとらえる、人生の手段としての労働、労働のための人生というような関係へと変態したのである。元来一方のための他方ということではなく、労働とは生活そのものであり、生活とは人生そのものである、よって人生とは労働ともいえる、という演繹関係にあったものである。そしてその関係性は人間にとって

の本来的なつながりであって、社会体制がいかよくなるようとも普遍的なものはずなのだが、社会の形によってはそれが人間の視野から外れてしまうことが発生してしまうのである。

まさに近代から現代にかけて急速に資本主義的な社会に変容していった日本においては、「労働と生活」「労働と人生」が分化してしまい三者における全体性が崩れ、目的-手段関係にあるものが本来的なものであると錯覚をおこすこととなっているのである。そしてそれは「広義の労働過程」から「狭義の労働過程」へ移行したことにより引き起こされた変容であり、その労働、生活、人生の三者関係が目的-手段関係となっている形を基礎とした視点でキャリアをとらえることが一般的であるという風潮が狭义的なものであるということまで述べてきた。さらに踏み込めば、それは労働過程論における精神的活動の目的意識性、合目的的意志の歴史的变化にともなう技術の進化が、科学技術先導型ともいえる現代において絶対視されることによって、偏向した価値観が醸成されることへの警鐘といえるかもしれない。

進歩史観からいえば、資本主義的経済機構は社会史的にはほんの通過点であって、それが最良かつ普遍的な形態であるはずもないのだが、無条件にそのように感じ取ってしまったことはまったくの迷妄であるということが、そこに前提されている。そしてその問題への警鐘はこれまでも鳴らされつづけている。カール=ポランニイ『人間の経済』にある、近代西欧の市場システムは人間社会それ自体の総体的機能と完全性を剥奪し、経済価値を支配的地位におしあげ、人間と自然をとともども商品に変えてしまった。すなわちすべてが自己調整市場に投げ込まれてしまったというわけだが、市場の出現に先立つ歴史は、人間の運命を、多彩な社会的・政治的・文化的社会制度へと復帰させてゆく方向づけの可能性をさぐる多くの手がかりを与えてくれる、というような批判的主張はまさにその役割を果たしているといえよう¹⁹。

X 結

以上、労働過程論を紐解きながら現代社会という先端部分で生じている歪みが、非商品経済下にあった広義の労働から資本制生産様式から生み出された狭義の労働に起因していること、すなわち非効率的、非合理的な「労働=生活=人生」そしてそこで必要とされる人間類の精神的活動を無理なく循環させる時間の流れが、効率性、合理性重視の「労働⇄生活⇄人生」を支配した時間の速度、つまり人間の精神的活動においては不相応な速さに凌駕されたことが歪みの原因となっていることを述べてきたわけが、原因がわかれば一般にはその対策を考えるということが次の段となるであろう。それは「狭義の労働⇄生活⇄人生」問題、すなわちワークキャリア問題の解決という狭隘な視点から、その実態的な問題としての狭義の労働に「広義の労働=生活=人生」という人間本来の精神的活動を循環させる場を共存させたキャリア観において、個人のキャリアという問題をいかに解決していくのかという方法を考えるということだが、その方法の端緒を開いてくれる思想はすでに先人たちによって示されている。

たとえば、マルクス哲学における自然概念を叙述したアルフレート=シュミットの主張などはそのひとつであろう²⁰。また福澤諭吉や西周の経験主義思想、それを否定しようとした観念的、唯心的な浪漫主義思想、そしてそれらを揚棄した自然主義思想といった流れを築いた日本の近代文学史を追っても同じことがいえるだろう。なかでもこの西欧的二元論から生じた日本自然主義思想にあって、あくまでも日本的二元論ともいえる「人生と大自然を一つにした、即ち有限を無限の背景に、平凡なる瞬間的現実を普遍永遠の相の下に眺める」²¹ことを主題として秀逸な短編を残した国木田独歩の思想は、本来は二項対立の構図とはならないにもかかわらず、実態としては二元論で語られそうな「広義の労働」「狭義の労働」の関係を日本の風土、文化に適したとらえ方をしようとするときに光明をもたらすように思えるのである。その検証については次の機会を待つことにするが、ここではそ

の外郭をもって結びへと向かおう思う。

洋の東西を問わず、心と体、精神と物質、陰と陽といった二元論で世界をとらえるということは珍しいことではない。いやむしろ多くの偉大な思想家によって生み出されたこれら二分法は、物事を理解するうえで大きな示唆をあたえてくれ、かつ思想を深めることにも大いなる力を貸してくれるものでもある。しかしこの二分法の心得方にも、人によって、国によって、地域によって違いがある。はなはだ乱暴な分け方をするならば、二元的なものを別個のものとしてはっきり対立させて、それぞれ独立しているが最終的には第三の立場に止揚されるという西欧的なもの²²と二元的でありそれぞれが対立もしているが、決して融合することがないという別れ方ではなく、なんとなく相互に折り合いをつけているという、たとえば仏教の中間思想のようなものに分別される。日本文化の源においてはこの両義性というものが尊重されるわけであって日本人に馴染みやすい考え方というのは、どうしても後者の二元論のとらえ方であると思えるのである²³。まさに、経験主義と浪漫主義が対立することで自然主義に止揚されるという明確な二元論ではなく、「広義の労働」「狭義の労働」双方に折り合いをつけながらゆっくりであっても次第に人間の精神的活動に相応しい時間の流れである「広義の労働=生活=人生」へとシフトしていくことが本来的な営為であると考えたいのである。ただ、その折り合いのつけ方という具体的な「対策」「方法」を思案しようとしたときには留意せねばならないことがある。留意なしでは矛盾が生じ、挙句元の木阿弥と化す可能性が内生しているのである。それは効率性、合理性の排除である。なぜなら非効率的、非合理的である課題の解決方法を考える手段として科学的、合理的に検証していく道をとることが自己矛盾であるといわずして何をか言わんやである。よってこの主題においてキャリアをとらえるうえで重要なことは、どのように「広義の労働」と「狭義の労働」の折り合いをつけながら実態的社会を生きるかという方法に拙速に飛びつくのではなく、この人

類史において永くつづいてきた「広義の労働過程」「労働＝生活＝人生」という人間の生来的ともいえる思想を基盤に据えたうえに立脚するということを、忘れないでいること、意識していることにあるように思うのである。

注

1 『新明解国語辞典』三省堂、2005

2 『哲学・思想事典』岩波書店、1998

ちなみに思想史における労働については「近代の労働表象は、宗教改革や経済とは別個に成立してきた機械論的世界像（科学革命や近代哲学によって構築された）を受け入れる。そのとき近代労働とその表象は人類史上はじめて自然から人間の解放を実現する。久しい間人類は自然に服従してきたが、いまや人類は技術によって自然を征服し支配すると確信する。自然の道具的支配という労働思想の到来とともに、原始社会以来の宗教的・道徳的表象はすべて消失する。17世紀の機械論的世界像は18世紀の啓蒙思想の中に浸透し、自然機械論と人間機械論とが少しずつ社会に浸透していき、ついには機械論的労働がすべての活動のモデルになる。このとき、「労働は人間の本質である」あるいは「労働は人間を自由にする」という労働中心主義の人間論が成立する。自由主義から社会主義までの近代社会思想は、労働を人間の本質と見る点では同一の地平にたつ」と書かれているが、本稿で追究していく「労働」もこの最後の一文に象徴的にとらえられているといえる。

3 『日本国語大辞典』では、貝原益軒の『養生訓』、中村正直訳の『西国立志編』において「労働」ではなく「労働」として使われているとある。また明治39年出版の自然主義作家島崎藤村『破壊』には、「労働」や「労働者」という語がみられる。

4 この「広義の労働」「狭義の労働」という表現は、内山節『自然と人間の哲学』岩波書店、1988によるものである。

5 K・マルクス『資本論（二）』9-10頁 岩波書店、1997

6 前掲『自然と人間の哲学』141-142頁で内山は、本来の意味での使用価値を以下のようにとらえている。「使用価値を交換する人間と人間の交通は二つの場所で成立する。ひとつは流通部面、もうひとつは生産-労働過程の内部である。つくりだされた使用価値は、第一に人間と人間の間で流通部面のなかで交換され、第二に生産-労働過程の内部でも、ある人のつくりだした使用価値が他の人に手渡され、それに再び新しい使用価値が付与されていくというように、使用価値の流通が成立している。故に使用価値とは、この二重の人間と人間の間で成立している交通が、使用価値の交換として成立していることに支えられて、はじめて使用価値であり得るのである。使用価値とはその生産者の主観的意図によってつくられるのではなく、使用価値の社会の上に生まれた社会的概念である。」

7 K・マルクス『経済学・哲学草稿』95頁 岩波書店、1999

8 拙稿「統合的ライフプランニング（ILP）概念における労働観の一考察」『駿河台大学論叢』51号149頁

9 前掲（K・マルクス）『資本論（二）』10-11頁

10 同上、19-20頁

11 同上、9-10頁

12 もちろん資本制商品経済においては使用価値が生産されないわけではないが、あくまでも主たる目的が商品価値であることでその陰の存在に回ってしまったということである。

13 前掲（K・マルクス）『経済学・哲学草稿』94-95頁

14 人間の精神的活動では消化できない速度で「労働＝生活＝人生」を送れば、当然どこかに歪みが生じる。そのひとつがいわゆるストレスであることは自明である。

15 武谷三男『弁証法の諸問題』127-139頁 勁草書房、1969

16 渡植彦太郎『技術が労働をこわす』農山漁村文化協会、1986

17 前掲（内山）『自然と人間の哲学』113頁

¹⁸ 同上, 114頁

¹⁹ K・ボランニー『人間の経済 I』62-63頁 岩波書店, 1983

²⁰ A・シュミット『マルクスの自然概念』280-281頁 法政大学出版局, 1973

「自然の復活」, 「自然の人間化, 人間の自然化」—それは今日ではもはや終末論的空想の産物ではない。人類がより理性的な状態に入るかどうか, いな, 人類が生きのびるかどうかは, その成功いかんにかかっている」という主張は近いものであろう。

²¹ 吉田精一『自然主義の研究<上巻>』367-368頁 東京堂, 1959

²² ヘーゲルやマルクスの弁証法論理などが容易に想像できる。

²³ これは拙稿「歌抄からみる西行の思想性」『社会デザイン学会学会誌 (7)』における結論でもあるのだが, 思想史的にも日本人のそれは証明されているように思える。